

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：34513

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370468

研究課題名(和文)「視点」とモダリティの言語現象 「意識」、エンパシー、阻止効果

研究課題名(英文)Linguistic Analysis of Point-of-View and Modality

研究代表者

西垣内 泰介(Nishigauchi, Taisuke)

神戸松蔭女子学院大学・文学部・教授

研究者番号：40164545

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：「証拠性」を含む「意識」(awareness)やエンパシー(empathy)など、意味的な観点から論じられてきた概念が日本語および多様な言語の「視点」にかかわる様々な言語現象の中で果たす役割を考察し、理論言語学の観点から言語の構造との関係で明らかにしていく。日本語を含む多くの言語で見られる再帰表現の長距離束縛の現象を中心に考察し、「視点投射」を持つ節構造を仮定する分析がこれらの現象に及ぼす理論的・経験的帰結を考察する。特にこの研究では意識と証拠性(evidentiality)、「阻止効果」とエンパシー、そして視点投射とモダリティの関係を特定的な問題とし、理論的・実証的に考察する。

研究成果の概要(英文)：This project sheds light on the way how such notions as evidentiality, awareness, and empathy, notions which have been studied from functional and meaning-based approaches, play important roles in the linguistic phenomena related to point-of-view (POV) in various languages, in relation to the structure of language from the viewpoint of theoretical linguistics. Crucially involved in the present study is the behavior of reflexive elements which show long-distance binding in languages including Japanese, so that the approach hypothesizing the clause structure involving the point-of-view (POV) projections yields significant theoretical and empirical consequences. The present project considers the relations in which the POV projections and modality interact.

研究分野：言語学

キーワード：視点投射 証拠性 再帰表現 モダリティ 阻止効果

1. 研究開始当初の背景

日本語の再帰表現「自分」の解釈には「視点」「有意識条件」「エンパシー」などの概念が関与することは早くから気づかれているが、これらの概念は機能主義の文法論や形式化されない意味論・語用論の立場から考察されることが多く、束縛に関わる現象に対する構造に基づく理論的・形式的アプローチの限界を示すものとして提示された。

本書の分析の目標は、有意識条件、エンパシーなどの意味的な要因が働く経験的事実の記述・説明に対して視点投射を中核とする構造的考察、およびそのような理論的枠組みを前提とする形式された意味論が制約を与えることを示すことである。

2. 研究の目的

「証拠性」を含む「意識」(awareness) やエンパシー(「共感」empathy) など、意味的な観点から観察し論じられてきた概念が日本語および世界の多様な言語の「視点」にかかわる様々な言語現象の中で果たす役割を考察し、理論言語学の観点からその性質を言語の構造との関係で明らかにしていく。具体的には日本語を含む多くの言語で見られる再帰表現の長距離束縛の現象を中心に考察し、「視点投射」を持つ節構造を仮定する分析がこれらの現象に及ぼす理論的・経験的帰結を考察する。特にこの研究では意識と証拠性 (evidentiality), 「阻止効果」とエンパシーおよび人称システム、そして視点投射とモダリティの関係を特定のな問題とし、理論的・実証的に考察する。

3. 研究の方法

「視点」がかかわる言語現象をテーマに、研究代表者、分担者が従来行ってきた研究をふまえ、より広い現象に対する説明の可能性、とりわけ多様な言語に見られる「視点」にかかわる現象の研究を研究課題構成員の協力で進めて行く。

意識と証拠性 意識性 (sentience) の関与する言語現象について分析を深めるほか、多様な言語・方言に実現する証拠性の理論的・実証的研究。

「阻止効果」とエンパシーおよび人称システム「阻止効果」が起こる要因として、統語的な素性システムとエンパシー(共感)の相互作用という観点から理論的・実証的に研究する。

モダリティとの関係 視点投射 (POV) がモダリティと明確に区別されるべきか、ともにより大きな範疇に属すると考えるべきか、具体的な問題に基づいて研究する。

4. 研究成果

阻止効果

中国語などで観察され、重要な問題領域を作っている阻止効果について考察した。視点投射とそれにもとづく「自分」束縛のメカニズムを提示し、日本語で阻止効果が顕著に見られるのは「自分」の先行詞が「視点焦点」である時で、「意識焦点」が関わるケースで起こる「有意識条件」の効果と相補分布をなすことを示した。

本研究の分析では、日本語に見られる阻止効果はエンパシーの制約の違反であり、これに関わるさまざまな言語現象について Kuno and Kaburaki (1977), 久野 (1978) などで「視点の一貫性」という概念のもとで分析された現象を、「基準クラス」の視点投射の「指標の一貫性」によって説明する分析を提示した。(論文 13)

中国語・日本語の阻止効果についての考察を進めた。「自分」と ziji についての微細だが体系的な差違を示し、日本語の阻止効果は視点投射の中で「基準」クラスの主要部を含む「一致の矛盾」によって起こるが、中国語の阻止効果は視点投射の主要部の種を問わず「一致の矛盾」によって引き起こされるという独自の分析を提案した。(発表 1)

ロゴフォリック階層と視点投射

Sells (1987) のいわゆる「主観表現」に関わる分析に関連し、「伝達源」は同時に「自己」「基準」であり、「自己」は「基準」でありうるが、その逆はないという「ロゴフォリック階層」の概念的基盤をなす含意関係について考察し、本研究の分析ではこの現象が下位の視点投射が上位の視点投射の位置へ主要部移動し、それによって上位の視点投射の指定部にある pro の指標が下位の視点投射指定部の pro に受け継がれることによって捉えられることを提示した。問題の主要部移動は「最小性」の効果を示すことを論じた。(論文 11)

「理由」を表す節と時制

理由を表す従属節における時制解釈について、従属節で述べられている知識を持つ主体からの視点 (= 認識視点) を基準時とする分析を整理したうえで、理由節に現れる証拠性表現の解釈についても、従属節の認識視点をを用いた分析を検討した。(発表 2)

知識・認識にかかわる概念の分析範囲を広げ、関係節にも分析を広げた。そのうえで、関係節も理由節と同様に、主体の認識が関係する場合としない場合で、時制の基準時となりうる時点に差があることを示した。これにより、時制解釈の視点による分析を

B-C 類従属節に広く適用できる可能性が示された。(発表2)

「理由」を表す節と「視点投射」

2つの補文をとる名詞「理由」の内項として証拠性投射が選択されると仮定することからいくつかの経験的帰結が得られることを示した。(論文5)

ダイクシスの多様性

石垣島、宮古島において視点に関する文法現象を調査した。特に宮古島において、ダイクティックセンターと空間オリエンテーションの関係、また、その時間に関するオリエンテーションに関する実験を行った。その結果、宮古島の話者は絶対オリエンテーションと相対オリエンテーションの両方の視点を併用することが分かった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

1. 西垣内 泰介 「変項名詞句」の統語構造. *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS)* (20) 127-142. 2017年3月
2. 郡司 隆男 「「知りたくなかった」は「知らない方がよかった」?」
Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS) (20) 13-34. 2017年3月.
3. 田窪行則 「琉球諸語研究の現在--消滅危機言語と向かい合う」『異文化コミュニケーション論集』第15巻7-17. 2017
4. 田村早苗 書評論文:山森良枝著『パースペクティブ・シフトと混合話法』*日本語文法* 17巻1号 120-128, 2017.
5. 西垣内 泰介 「指定文」および関連する構文の構造と派生. 『言語研究』150, pp. 137-171, 2016.
6. 西垣内 泰介 「変項名詞句」としての「量関係節」「潜伏疑問」「主要部内在型関係節」. 国立国語研究所共同研究プロジェクト(基幹型)『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』平成27年度 研究報告書(3) 118-138. 2016年3月
7. 西垣内 泰介 「指定文」の統語的特性. *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin (TALKS)* (19) 101-122. 2016年3月
8. 郡司隆男 「項を2つとる名詞コピー文の形式意味論的分析」*TALKS*

(*Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin*) No. 19, 17-28. 2016年.

9. 田窪行則 「知識ベースの構造について」藤田耕司・西村善樹編『日英対照・文法と語彙への統合的アプローチ』開拓社, 180-185. 2016.
10. 中川奈津子, Tyler Lau, 田窪行則 「八重山語白保方言の文法概要」『琉球諸語 記述文法』琉球語記述文法研究会 1-60, 2016.
11. 西垣内 泰介 ロゴフォリック階層と視点投射. *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* (18) 85-102. 2015年3月
12. 郡司 隆男 「日本語のコピュラ文の形式意味論的分析」*Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* (18) 13-24. 2015年3月
13. 西垣内 泰介 エンパシーと阻止効果--「自分」の束縛と「視点投射」『言語研究』(146) 109-133. 2015年3月
14. Nishigauchi, Taisuke. Reflexive binding: Awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics*. 23(2) 157-206 2014年5月
15. 西垣内 泰介. モダリティと視点投射. *Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin* 17, 107-114. 2014.

[学会発表](計6件).

1. Taisuke Nishigauchi. The blocking effect as conflicting agreement. *Kyoto Workshop on Japanese/Korean Linguistics* 2015年5月9日.
2. Sanae Tamura. Tense and point-of-view phrases in Japanese relative clause. *Kyoto Workshop on Japanese/Korean Linguistics*, 2015年5月9日.

[図書](計 件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西垣内 泰介 (NISHIGAUCHI, Taisuke)
神戸松蔭女子学院大学・文学部・教授
研究者番号: 40164545

(2) 研究分担者

郡司 隆男 (GUNJI Takao)
神戸松蔭女子学院大学・文学部・教授
研究者番号: 10158892

田窪 行則 (TAKUBO, Yukinori)
京都大学, 文学研究科・教授
研究者番号: 10154957

田村 早苗 (TAMURA, Sanae)
北星学園大学, 文学部, 講師
研究者番号: 90728346

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()